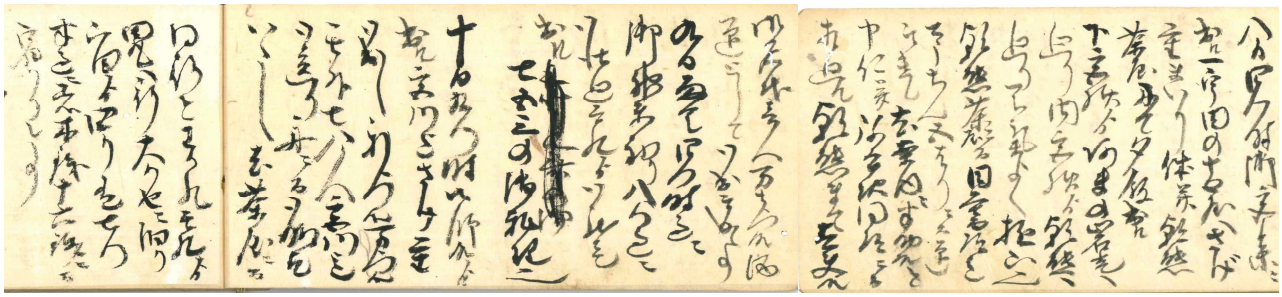
郷土の古文書

その３８　伊勢参宮道中日記（二）

編集・発行：五日市郷土館
あきる野市五日市920-1
発行：令和６年５月８日
改訂：令和８年１月８日



解読文

八日

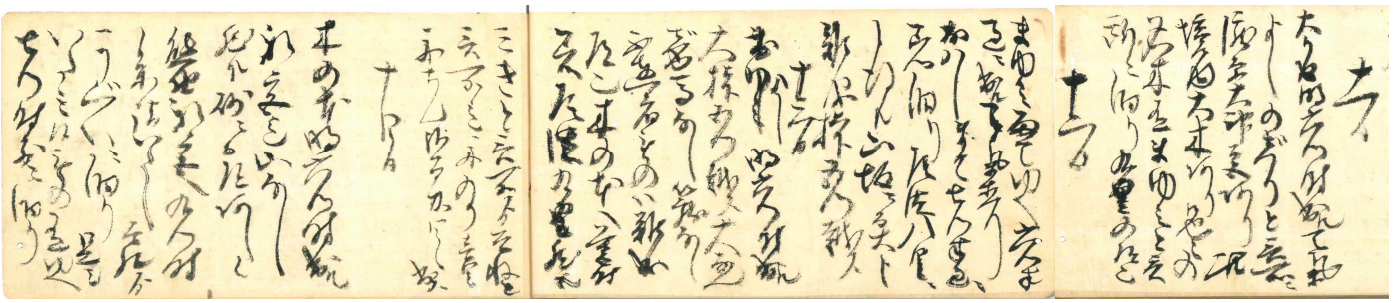
四ツ時御宮参ニ出ル　一宇田の
ちや屋へさぎ重まいり休（堤じゅう）井　朝熊（あさま）
茶屋にて夕飯出ル　下宮様（外）ゟ（より）
あまの岩登（と）へ廻り　内宮（ないくう）様ゟ
朝熊へ廻り　天気よく遊（ゆさん）山也
朝熊茶屋ニ而日暮道迄ちうちん（提灯）
五はりニ而迎（つかわされ）被　遣候　尤案内ニ
半助様と申仁（ならびに）井　弥吉様同
道ニ而相廻ル　朝熊まで太夫様御
名代壱人　万右衛門様酒（さかむかえ）迎
として　御（おいでなされ）出　被成候事

九日

雨天　四ツ時過ニ御神楽初り
八ツ過ニ御仕廻（おしまい）　それゟ御馳走
出ル　七五三の御料理也

十日

九ツ時御師様ゟ出ル　宮川迄さ
け重御出し　新右衛門様　万右
衛門様　其外七八人宮川迄御
送り　舟ニ而御馳走いたし　尤茶
屋ニ而同行とわかれ　それゟ田丸
へ行　大かセニ泊り　山田ゟ四り
有　七ツ半過ニ着　木銭十六銭ニ
而宿かり候事



十一日

大かセ明六ツ時出ル　天気よし
のじりと（いう）言　所ニ瀧原大神宮あ
り　此境内大木あり　色々の名
木有　まゆミと言所ニ泊り九里
の道也

十二日

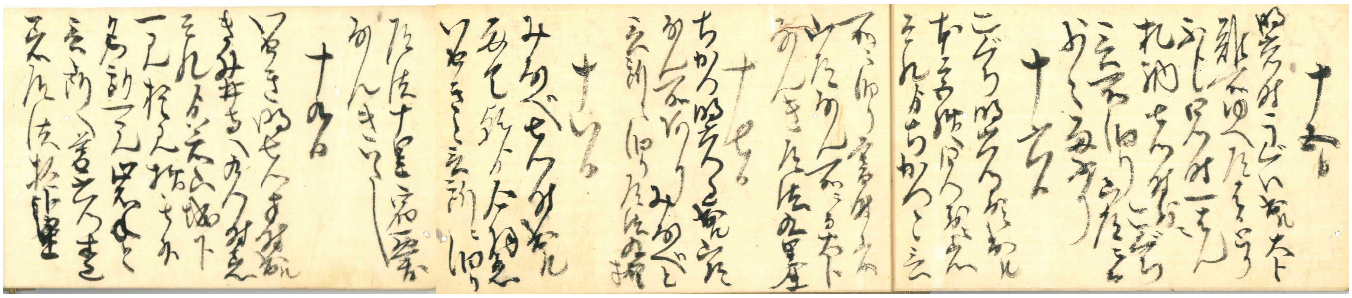
まゆミ雨天ゆへ六ツ半過ニ出ル
天気直り　おハしまで（尾鷲）七ツ半過ニ
着泊り　道法八里ニ候得共　山坂ニ
而大分難儀（峠カ）　拝　五ツ越ス

十三日

おハし明六ツ時出ル　大峠五ツ
越ス　大なんじゅ（難渋）　馬なし　籠な
し　不達（たつしゃ）者ものハ難成道也　木
の本へ暮時着　道法九里
然（しかれども）共ミきと言所ゟそねと言（三木）
所迄舟（ふね）のり壱里　舟ちん弐百
廿四文出ス

十四日

木の本明六ツ時出ル　新宮迄山
なし　然共砂ニ而道あしく熊野新
宮へ九ツ時参詣いたし　それゟ
うぐいニ泊り　足シいたミ（マメ）候も
の有ゆへ七ツ時前ニ泊り



十五日

明六ツ時うぐい出ル　大分難所
ゆへ道はかどり不申候　四ツ時
一はん札納　七ツ時前ニこぐち言
所泊り山道ニ而少々雨ふり

十六日

こぐち明六ツ前ニ出ル　本宮様へ
四ツ前ニ着　それゟちかつと言所
ニ泊り　暮時宿山道なん所ニ而大
分なんき　道法九里余

十七日

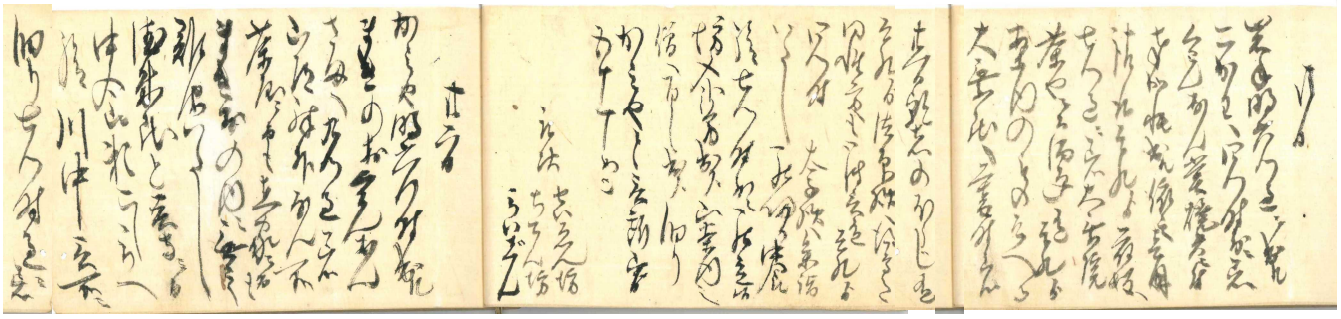
ちかつ明六ツ過出ル　山道なん
所あり　みなべと言所ニ泊り　道
法九里半

十八日

みなべ七ツ時出ル　雨天朝ゟ合
羽着　いセきと言所ニ泊り　道法
十里　宿悪敷なんきいたし候

十九日

いセき明七ツ半時出ル　きみ井
寺へ九ツ時着　それゟ若山城下
一見　権見様（鬼）其外名所一見　岩
手（田）と言所へ暮六ツ半過着　道法
拾弐里



廿日

岩手明六ツ過ニ出ル　こかわへ四ツ時前ニ着　くわんおん（観音）堂焼失ニ付奉加帳出ル　依之（これにより）壱冊請取　それゟ荷坂へ七ツ過ニ着　大乗院

茶やニ而酒迎有　それゟ案内のものそへる　大乗院へ暮時着

廿一日

朝志のほうじ有　それゟ法印様へ（こそんいをえ）得御尊意同性方へも御伝言有　それゟ四ツ時太子様へ参詣いたし　罷帰り中食後七ツ時前ニ罷立候　坊入弐分出ス　山案内之　僧へ百文出ス　泊り

かミやと言所山ゟ五十丁め也

せいるん坊

取次　ちてん坊

らい志ん

廿二日

かミや明六ツ時出ル　まきのおくわんおんさまへ九ツ過着　山道　殊（ことのほか）外なん所　茶やニ而も在家ニ而もまきおの内ニ無之難儀いたし

徳朱（寿）院と言寺ニ而申入々山頼こしこらへ給　川中言所ニ泊り　七ツ時過ニ着

伊勢参宮道中日記（二）の道中図解　※□は泊まった所

［三重県伊勢市山田から大阪府川中まで］

享保13年2月7日

《三重県》

山田⑫ 2月7日

2月8日午前10時頃出発　外宮（げくう）参拝、それより天の岩戸へ廻り内宮（ないくう）へ参拝、一宇田（いちうだ）の茶屋にて提重（さげじゅう）（提げて携帯するようにつくられ、酒器、食器など組入れた重箱）参り休む　昼食をとった模様

朝熊ヶ岳（あさまがたけ）へ着、半助様と弥吉様の案内で見物、天気よく遊山なり。朝熊茶屋にて夕飯（さかむかえ）でる。日暮に太夫様名代と万右衛門様酒迎として提灯（ちょうちん）五張にて迎えに来て宿に帰る

9里

山田⑬ 8日

9日雨天午前10時過御神楽（かぐら）はじまり、午後2時過終る。それから七五三の料理（本膳七菜・二の膳五菜・三の膳三菜の和食の上級食）ご馳走になる

山田⑭ 9日

10日正午頃御師（おんし）方を出発、新右衛門様万右衛門様その外七、八人に宮川迄送られ、出された提重参り舟にて御馳走になる。山田より田丸へ4里

相鹿瀬（おおかせ）⑮ 10日

木銭（きせん）16銭にて宿借りる（木賃（きちん）〈銭〉宿（やど）は米を持参し、薪代を支払って自炊する宿で安価な宿泊法として盛行）

間弓⑯ 11日

11日朝6時出発　野後（のじり）（現在の地名は滝原町）で滝原大神宮へ参詣、この宮には三社あり、その造りは伊勢神宮と同じ。境内に大木名木有り

12日雨ゆえ朝7時頃出発、天気よくなる　山坂にて大分難儀、峠5つ越す、道法8里

9里

尾鷲（おわせ）⑰ 12日

13日朝6時出発　大峠5つ越す、馬なし、籠なし、大難渋、途中三木（みき）からそね迄、一里舟に乗る　舟賃224文道法　9里

木本（きのもと）⑱ 13日

14日朝6時出発　山なし、けれども砂にて道悪し

〈和歌山県〉

熊野新宮へ正午に参詣、足痛むもの有るため4時前に宿へ

宇久井（うぐい）⑲ 14日

15日朝6時出発　大分難所ゆえ道はあまり進めない、午前10時に一番札納める（一番札所青岸渡寺から次の熊野那智大社を参詣と推測）少々雨降り

（近津湯↓近露）

近露（ちかつゆ）㉑ 16日

16日朝6時前出発　熊野本宮へ午前10時前着き参詣、山道難所にて難儀

9里半

小口（こぐち）⑳ 15日

17日朝6時出発　山道にて難所あり

南部（みなべ）㉒ 17日

10里

18日朝5時出発　雨、朝から合羽（かっぱ）着る　井関の宿悪く難儀

井関㉓ 18日

19日午前5時頃出発　正午に紀三井寺（二番札所）着、若山城下、権現様その他名所一見　暮7時着

12里

岩出㉔ 19日

20日朝6時出発　粉河（こかわ）へ午前10時頃着、粉河寺（三番札所）、この所の観音堂焼失のため奉加帳一冊請取る

荷坂へ午後4時過着、大乗院茶屋にて酒迎あり、それより案内人にて行く

大乗院㉕ 20日

（日記には書かれていないが、高野山へ登った模様）

21日朝志（こころざし）のほうじ、太子様（弘法大師）参詣、帰って昼食、坊入と山案内の僧へ礼銭出す　午後4時前出発　神谷へ

50丁

神谷（かみや）㉖ 21日

《大阪府》

22日朝6時出発、槙尾（まきのお）寺（現施福寺・四番札所）観音様へ正午過着、ここには茶屋も民家も無く難儀、徳朱（寿）院（槙尾寺境内にある寺）という寺に入山頼む

川中㉗ 22日

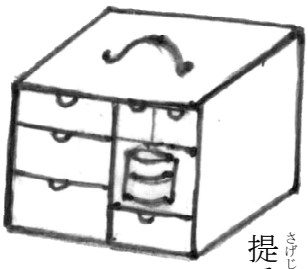
道中解説

前日6日に泊った松坂で皆髪をさかやきにして参宮のための身支度を整えた一行は、7日朝6時出発、10時に明星茶屋で酒迎(さかむかえ)をうけ、はじめて全員で伊勢山田迄籠に乗り伊勢神宮の入口である宮川を舟で渡り御師(おんし)宇野甚右衛門宅へ着き泊まりました。8日朝いよいよ目的の伊勢神宮を参拝することになりました。外宮と天の岩戸を参詣し、それより約700m程進み内宮を参詣しその後、一宇田(いちうだ)の茶屋で昼食をとりました。それより一行は朝熊ヶ岳(あさまがたけ)へ登り、2人の案内人の先導でいろいろ見物「天気よく遊山也」と書かれていることからも、やっと旅行気分を味わった様子がうかがえます。御師宅の食事や接待は上等でしたが、この「覚日記」の後述をみますとお神楽・礼金等諸入用金として御師へ74両という大金を預けていた事にも驚かされます。しかし、7日御師宅に着くと同時に後記にある通り、御神楽金42両、御供料2両、坊入(ぼういり)20両、蒔銭2両、計66両を前もって御師と申し合わせた通り奉納したと思われます。その他奥方、御子息方、宇野甚右衛門殿、案内方や同子供衆、下代両人、給仕衆への心付けとして計5両2分差し上げていますので用意してあった74両はほとんど使われたと思われます。

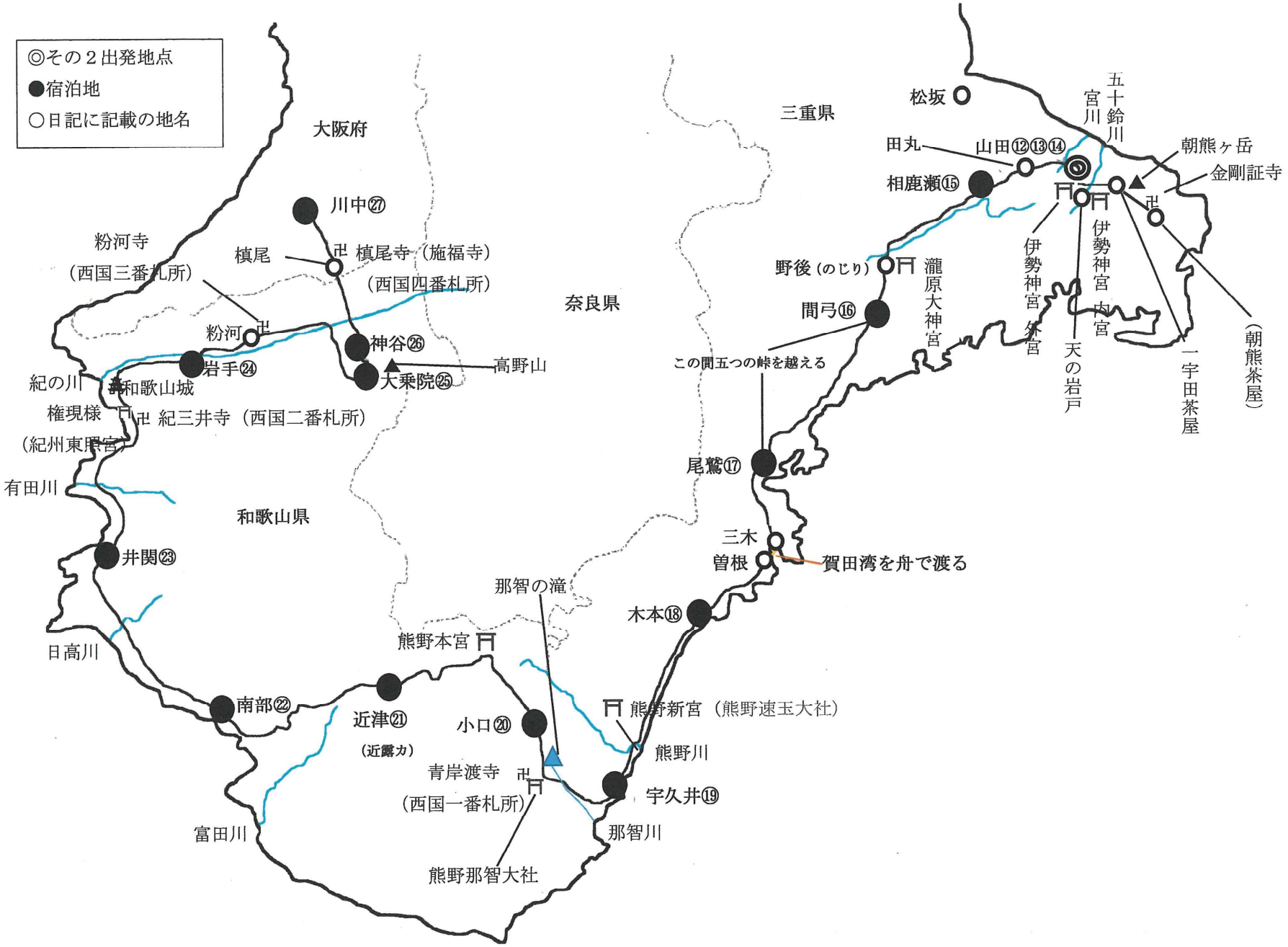
3日間伊勢で過ごした一行は、10日正午御師方を出発、手代7、8人に宮川迄送られ、出された提重(さげじゅう)の御馳走を舟の中で食べました。山田より田丸を経て4里程歩き、相鹿瀬(おおかせ)へと進み、ここでは宿がとれなかったのか、旅の中で一回だけ米を持ち込み薪代を払って自炊する木賃宿に泊まりました。11日朝6時、相鹿瀬を出発「のじり」に着き滝原大神宮を参詣しています。境内に大木・名木があると書かれていることから、古い大神宮の様子が知れます。皇大神宮十所別宮の一つであることから、滝原を地名とすることを恐れ多いとして、当時は「のじり」といわれていました。12日は間弓で泊まりそれより次の尾鷲の宿まで峠を5つ超え8里の道を大変だったようです。それでも翌日13日朝6時に尾鷲を出発、紀伊半島の東海岸を進みます。「大峠五ツ超ス大なんじゅ」と書かれ、その上、馬も籠もなくといい、大変さが伝わってきます。大難渋のため三木から曽根迄1里舟に乗り木本(きのもと)迄は山はないけれど砂道を歩きこれも疲れたようです。それより正午に熊野新宮へ参詣し、足の痛むものがいるため、早めに宿をとり宇久井へ泊まりました。15日朝一番札所青岸渡寺から熊野那智大社を参詣、その日は途中の小口で泊まり、熊野本宮へ午前10時前に着き参詣しましたが、これまで雨の中の山道で難所続きであまり道は進めなかったようです。

本宮より近露まで下り1泊すると、17日朝6時に出発して海岸べりの南部(みなべ)へ着き泊まりました。翌朝紀伊半島の西海岸沿いに進み井関に泊ったのですが最悪の宿だったらしく、翌19日は早めに宿を出て二番札所紀三井寺へ足を運び、ここでは和歌山城下で名所見物をしています。そして紀ノ川に沿って上流へむかい岩出に泊まり、翌20日三番札所粉河寺の観音堂へ行ったところ焼失していたため奉加帳を受け取っています。推測するとそれより上流へ進み高野口より高野山へ登ったようで、その日は大乗院で泊まっています。翌21日山案内の僧にて山中見物して歩いたようです。同日午後4時頃下山し途中神谷へ1泊しました。22日朝大阪堺へむかう途中四番札所槙尾(まきのお)寺へ参詣し、ここでは宿も茶屋もなく難儀してやっと川中という所で宿につくことができました。

伊勢参宮を兼ねて西国観音霊場を順番に参詣するのは、一生に一度と思う当時の人達からすると当然のことと思えます。また食事の内容はほとんど書かれていないのですが、昼食や間食はそれぞれ自分で頼んで食べたと思われ、宿も予約などなしにあいている宿に分散して泊ったようで、大変苦労している様子が簡単な文章からも察せられます。



提重(さげじゅう)


◎その２出発地点
●宿泊地
○日記に記載の地名
大阪府
三重県
奈良県
和歌山県
松坂
五十鈴川
宮川
田丸
山田⑫⑬⑭
朝熊ヶ岳
金剛証寺
相鹿瀬⑮
伊勢神宮 外宮
伊勢神宮 内宮
天の岩戸
一宇田茶屋
（朝熊茶屋）
野後（のじり）
瀧原大神宮
間弓⑯
この間五つの峠を越える
尾鷲⑰
三木
曽根
賀田湾を舟で渡る
木本⑱
熊野新宮（熊野速玉大社）
熊野川
宇久井⑲
那智川
那智の滝
熊野本宮
小口⑳
青岸渡寺
（西国一番札所）
熊野那智大社
近津㉑
（近露カ）
南部㉒
富田川
日高川
井関㉓
有田川
紀の川
和歌山城
権現様
（紀州東照宮）
紀三井寺（西国二番札所）
岩手㉔
粉河
粉河寺
（西国三番札所）
槙尾
槙尾寺（施福寺）
（西国四番札所）
川中㉗
神谷㉖
大乗院㉕
高野山